－所蔵作品紹介－

山口　正城　YAMAGUCHI Masaki

連結せざる構造による数群の縦線

れんけつせざるこうぞうによるすうぐんのたてせん

作品データはこちら

山口正城は旭川市に生まれた。市内の旧制中学校を卒業後、上京して東京高等工芸学校図案科（現・千葉大学工学部工業意匠学科）に学ぶ。卒業した1926年より大阪市立工芸学校（現・大阪市立工芸高等学校）に勤務し、図案科担当としていちはやくバウハウスの理論をとり入れたデザイン教育を行った。同校の教え子のなかにはデザイナーの山城隆一や早川良雄、戦前から抽象画にとりくんだ中村真や田中健三、勝田寛一ほかがいる。

教育活動のかたわら、彼は自由美術展に出品するようになり、第１回展（1937）にフォトグラムの技法による写真作品を、第３回展（1939）からは烏口（からすぐち）による直線で構成した抽象絵画を発表した。ここにあげたのは第５回美術創作家協会展(自由美術展の改称)に発表された作品で、〈連結せざる構造による〉というタイトルを共通してもつ５点のうちの１点である。

前衛志向の山口は、20世紀美術のどんな特質に過去の美術との分断点を認めていたのか。後年の自筆文を読むと、ふたつのポイントがあげられている。ひとつは、制作者が「あらゆる素材、あらゆる道具、あらゆる物体を使用する権利をもった」こと。そして「材料の抵抗を征服するというよりは、材料の発言をひき出す」という発想の転換、である。自らの制作に絵筆ではなく製図用の烏口をとりいれ、その道具から必然的に導き出される直線表現を求めたのも、そんな確信の実践にほかならなかった。

また当時の他の作品も見ると、図像にいかに動きを与えるかが、山口の構成上の課題であったことがわかる。ここではその解決の仕方が、実にリズミカルで解放感にあふれている。こうした構成の背景には、バロック音楽のカノンやフーガに典型的に示された対位法原理の自由な視覚的応用や、抽象映画（絶対映画）からの示唆が推測される。山口は音楽好きで自らヴァイオリンを奏で、また映画を20世紀芸術の代表のひとつと認めていたのである。

*引用は山口正城「モダン・メチエ」（『アトリエ』336号、1955年２月）より。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より